

Selecting Books for Children Up To Age 3: In Response to Psychological vs. Morphological Development

Yasuko Shirasu

Many guidebooks and booklists are available in Japan for those who are interested in or responsible for selecting good books for children of all ages. Recommended books are most commonly selected, taking the psychological development of the children into consideration. There is, however, a unique method of matching appropriate books to children based on their morphological development. In this study two booklists containing quality books for children between the ages of 0 and 3 years old are compared in detail. They were compiled by two different non-profit-making organizations offering specialist courses in children's books for adults. One of the main findings of the current study is that there exists a considerable difference in the choice of books between these two lists. Only 10 per cent of the total number of books on the lists are the same. Three conclusions can be made about the booklist which was compiled in response to the morphological development of the children. It is more useful on the grounds: that it contains a larger proportion of newly-published books; that it is based on the accurate content analysis of individual books; and that the selected books are listed month by month corresponding to the growth of children.

0～3 歳児を対象とした絵本の選書 ～心理学的発達対応と形態学的発達対応～

白 須 康 子

はじめに

2003 年から今年にかけて二つの NPO 法人が主催する子どもの本に関する講座を受講し、二つの異なる選書論に触れる機会を得た。一つは小樽をベースに 1988 年から「大人のための児童文化講座」を開いている絵本・児童文学研究センターである。ここでは成人の生涯教育の一環として多様な児童文化の世界を絵本・児童文学を中心に心理学や哲学の観点も取り入れて 54 回の基礎講座を開講している。もう一つは山梨県に子どもの本の図書館を設立する目的で 2005 年に立ち上げたばかりの NPO 法人山梨子ども図書館による、全 50 回の講義で構成される「子どもの本の専門家養成講座」である。

子どもの成長段階に応じた適切な本を選書するための拠り所として、現在主流になっているのは発達心理学である。絵本・児童文学研究センターでも発達心理学およびユング心理学を基盤とした年齢対応の選書を行い、0 歳児から中学・高校生および一般読者までを対象とした児童書の年齢別ブックリストを講座受講者用のテキスト（『基礎講座資料集改訂版 TEXT1』絵本・児童文学研究センター編、2002）の中に盛り込んでいる。一方、山梨子ども図書館では長年にわたって絵本・児童書の

専門店を経営し、ブッククラブの子どもたち（0 歳児から高校生）に毎月一人一人個別の選書・配本を行っている長谷川敏夫氏が発達対応の選書論および子どもの本の選び方の講座を担当し、形態学を援用した独自の絵本と子どもの本の選書論を展開している。

そこで、本稿では生後 10 ヶ月から 3 歳児までに対象を限定して、絵本・児童文学研究センターのブックリストと山梨子ども図書館が講座の資料として提示した代表的選書リスト（2003～05 年にかけてブッククラブの子どもたちに実際に配本された絵本のうち代表的なものを選んで作成したもの）を比較検討し、心理学的発達対応と形態学的発達対応による選書でどのような相違が見られるかを調べてみたい。なお、前者を補足するものとして『すてきな絵本にであえたら』（工藤、2004）も参考にする。

選書論とブックリスト

上記二つのブックリストの具体的な比較検討に入る前に、日本における絵本と子どもの本に関する選書の基準を明示し、それに対応する選書例を挙げている文献と、参考書として読者が利用できるように個々の絵本の内容や対象年齢を紹介しているブックリストを概観しておくことにする。

まず、本格的な子どもの本の評論集として瀬田（1985）の『絵本論』が挙げられる。作家および翻訳者としての立場から古典絵本を中心とした一つ一つの作品に対する評価や作家論などを詳細に試みている。一般読者向けの選書論としては『絵本の与え方』（渡辺、1978）、『子どもの本の選び方・与え方』（鳥越、1982）、『絵本の森へ』（松居、1995）等が

ある。渡辺（1978：83～5）は良い絵本の条件として（1）一つの意図が一冊にゆきわたったもの、（2）芸術的にすぐれた絵、（3）すぐれたことば一文章一物語、（4）絵と文章の一致したもの、（5）発達段階に適したもの、の五つを列举し、特に絵本というメディア特有の視覚芸術的側面と文芸学的な物語性の重要性を強調している。

ブックリスト系の文献では、日本児童文学者協会が1977年に刊行した『日本の絵本100選』と『世界の絵本100選』の改訂版がともに1981年に出版されている。どちらも当時入手可能なもの（海外の作品については邦訳が入手可能なもの）に限定した選書を行っているが、後者に関しては「絵本の原書の制作年代は選択の際の条件とはしなかった」（p. 6）と断っている。これら2冊のブックリストは同じ時点で日本と海外の絵本をそれぞれ同じ数だけ選んでいるが、『改訂・日本の絵本100選』（1981）は前回に比べて約半数が入れ替わり、その内訳は1970年代の作品が59冊、80年代の作品も12冊入っているのに対して、1950～60年代の作品は29冊であり、全体の約7割が比較的新しい本になっている。それに対し、『改訂・世界の絵本100選』（1981）では、前回との入れ替わり率は約3割に留まり、1970～80年代の新しい作品が60冊、1950～60年代の古い作品が40冊で、いわゆる「古典」対「新刊」の割合が2対3と日本の絵本に比べて古典重視の傾向が見られる。ただし、これらの本の出版年は邦訳が出た年なので、原書の出版年を問題にすれば海外絵本の古典重視の傾向は更に強まる。

このように従来のブックリストは長い年月にわたって子どもたちに読み継がれてきた海外の古典的作品を多く含み、すでに評価の定まった絵本に重点を置きすぎて、新刊の優れた作品があまり収録されていないような実用性に欠けるものが多かった。それに異を唱えて清水（1984・

1985・1986) は幼稚園・保育園児を対象にした 300 冊のブックリストを作成する際、1970 年代以降に出版された新しい絵本を積極的に選び、国産絵本と翻訳絵本の割合を 3 対 2 という構成比にして、日本人の作家による日本の子どもたちの文化や風土に合った作品を多く採り入れ、更に全体の 1 割強を広い意味での科学を扱った「知識絵本」が占めるように配慮した。また、このブックリストの巻末には対象年齢別リストのほかに、季節別、主題別、主人公別の各リストが載っている。これとほぼ同じ年齢層の子どもを対象とした最近のブックリストとしては、ちひろ美術館編の『親子で楽しむえほん 100 選』(1999) がある。なお、本稿で扱う 0～3 歳児を対象を絞ったものとしては、田中(1995)や向川(1998)のブックリストがある。

清水(1984・1985・1986)のブックリストと同様の形式——つまり各作品を五十音順に配列し、絵本の表紙の写真、書名、著者・画家名、出版社、初版年、本のサイズ、ページ数、価格といった書誌的事項のほかに簡単な内容の紹介を加える——を採用しているが小学生対象の絵本も扱っているのが、日本子どもの本研究会絵本研究部編の『えほん：子どものための 500 冊』(1989)とその追補版『えほん：子どものための 140 冊』(1995)である。そして、絵本のみならずヤング・アダルト向けの作品まで更に対象年齢層を拡大して子どもの本全般をテーマ別に解説しているものに、『絵本・子どもの本総解説第 5 版』(赤木、2002)がある。しかし、このブックリストではヤング・アダルト対象の本にのみ YA のマークが付いているが、それ以外の絵本・児童書には対象年齢が提示されていない。『大人のための児童文学講座』(田中、2005)は児童文学の中心的なテーマである「家族」と「子ども」に焦点を絞って 47 冊の世界の児童文学作品を紹介している。

ここまで紹介したブックリストは基本的に大人の利用者を対象とした

ものであるが、本を読むのが好きな小学生以上の子どもたちに自分の手で自分に合った本を探し出すのを手助けするためのテーマ別ブックガイド『キラキラ読書クラブ：子どもの本 644 冊ガイド』（2006）が最近刊行された。

絵本・児童文学研究センターのブックリスト

絵本・児童文学研究センターでは発達心理学と近代教育理論の感覚教育を重視した発達論を選書のベースとしている。就学前の子どもについてはその心理学的発達段階に応じて4つの年齢層（0～3歳、3～4歳、4～5歳、5～6歳）に区分し、それぞれに対応した選書を行っている。まず、0～3歳前後の母子一体感覚の世界に生きる子どもには五感覚の発達を促すような絵本を中心に与えることが重要であるとしている。次に、3～4歳児になると体験領域の拡大とともに母子分離の心理が表れる。この心理的に不安定な時期にはバランス感覚を保つことが大切で、目的重視型の『しょうぼうじどうしゃじふた』（渡辺・山本、1963）のような物語と、存在重視型の『どろんここぶた』（ローベル、1971）のような物語の両方を与えていく必要があるとしている。このようにして分離不安を体験した子どもは4～5歳になると第一次反抗期を迎え、空想力の発達とともにアニミズムの世界で遊ぶようになるので、この時期の子どもには人形や動物を擬人化した物語やナンセンス・科学・言葉遊びの本などが必要になる。そして、5～6歳児は自我の萌芽期を迎え、意識的な世界が芽生え始める。この時期には近代教育理論の本質であるところの多くの感動体験を通して心の内部感覚を活性化させることが重要になる。彼らには自然や対人関係を扱った絵本、更に自分の発見を通して生きる喜びを高めることができるような芸術性、文化性の高い作品を与

えていくべきであるとしている。

このような考えに基づいて絵本・児童文学研究センターでは選書を行い、受講生用のテキスト（2002）に資料として年齢別ブックリストを掲載しているが、それには書籍名、著者・挿絵画家・訳者の名前と出版社および出版年といった書誌的事項のみが記載されている。本稿で対象としている年齢層の子ども向けの絵本については「0～3歳前後」のブックリストに書名の五十音順に合計75冊の絵本がまとめて紹介されている。3歳以降の就学前の子どもと小学生については「3～4歳前後」、「小学5～6年生」というように、2年または2学年をひとつのユニットとして各ブックリストを作成し、中学生・高校生・一般対象のものは一括して約300冊の児童文学作品を紹介している。そして、どのリストの冒頭にも「本資料はスタンダードが中心です」との但し書きが添えられている。

山梨子ども図書館の代表的選書リスト

山梨子ども図書館は選書のガイドラインを設定するにあたり、適応図書を概念論的に人間心理に適合させる方法は客観性に乏しいとして、人間の生物学的な成長段階に適合した論理的で、より客観性の高いものを求めるために形態学をそのベースとしている。形態学という用語はゲーテが作ったもので、『ブリタニカ国際大百科事典第6巻』によると「生物の体のもつ形態・構造のあり方、意義、法則性などを論じる生物学の一分野」であり、「生物の個体および個体以下のレベルで目に見えるものを対象とする」（1995: 148）とある。このようにゲーテは自然哲学的な立場から生物体がどのように形成され、変成していくかを研究する学問を形態学と呼んだ。そして、このような生物学の一分野である形態学

の方法を文化の場面に応用したのが文化形態学である（『世界大百科事典第8巻』1988: 528）。

そこで、山梨子ども図書館の選書論の特徴は、まず「個体発生は系統発生を繰り返す」というヘッケルの反復説を応用した系統的選書によって読書に一定の方向性を与えること、次に生物学的なヒトの成長、特に乳幼児の認識力の発達段階と大脳旧皮質の完成過程を考慮した段階的な選書を行うこと、更に成長の方向予測としてトインビーとシュペングラーの文化形態学を援用していることである。①哲学、②高等宗教、③戦闘体という3つの条件を満たした文明のみが正常な世界国家に成長することができたというトインビー（1979）の理論を人間に当てはめると、①は自己の方向性に対する方法論、②は他への影響力の大きい高度な人格、③はこれら2つを表現するための体力となり、この3つがすべて揃って初めて健全な人間といえるわけだが、③は子どもが遊びを通して身につけるものであるから、①の方法論と②の高度な人格を絵本の読み聞かせや自ら読書することによって培うことを将来的な目標として見据えている。

以上の考え方を基盤にした山梨子ども図書館の代表的選書リストには本稿で扱う0～3歳児向けの絵本は、生後10ヶ月～2歳児対象のものが45冊、2～3歳児対象のものが37冊、合計82冊が掲載されている。この選書リストの特色は、まず子どもの成長段階に即して3歳までは月齢ごとに、3歳以降の未就学児のリストは1年を四半期に分割して、就学児対象のリストは4月からスタートして月毎にそれぞれ詳細な選書が行われていることである。第二にすべての代表的選書リストに共通していることだが、「基軸になる選書」のほかに「副読本的・補助的に加える選書」と「性差・季節対応の選書」を行っている点である。第三にどのリストにも「2003～2005年」と記されているように、そのリストは絶

対的なものではなく、毎年日本で出版される約 800 冊の新刊絵本の中から内容分析によって優れたものを選書することにより、常に最新のものにアップデートされることである。

ブックスタートとファーストブック

発達心理学では生後 1 ヶ月から 1 歳半までの時期を乳児期、1 歳半以降 3 歳までを幼児前期と呼んでいる。ピアジェの認知発達理論によると乳児期の子どもは外界の対象を認知する手段として主に感覚と運動に頼るが、1 歳半から 2 歳にかけて「表象能力」が発達すると、実際に目の前には存在しない対象についてもそれを頭の中に思い浮かべたり、以前見た対象を思い出すことによって心内に再現することができるようになる。この表象能力の出現によって絵本を見ても、その絵が何の絵なのか理解できるようになる（田島、西野、矢澤；1985）。

一般的に生後 10 ヶ月がブックスタートの時期とされているが、これはピアジェが「対象の永続性」の理解が始まるのが生後 9～11 ヶ月頃であると述べていることによる。しかし、その後の研究で子どもは乳児期のもっと早い時期から隠された対象の存在を理解していることがわかっている（吉田、片岡；2003）。それでも、絵本・児童文学研究センターをはじめ心理学的発達対応の立場をとる場合は、個人差などを考慮してブックスタートを生後 10 ヶ月頃としているところが多い。

一方、形態学的発達対応の立場をとる山梨子ども図書館も生後 10 ヶ月をブックスタートの目安としている。その理由のひとつは生後 10 ヶ月頃から認識力が急速に発達し、子どもは平面にプリントされた表象の認識が可能になることである。もうひとつは脳生理学的に誕生時には未発達であった本能や感情を司る脳旧皮質の形成がある程度完成して

くるのがこの時期であるからである。

工藤（2004）はファーストブックの条件として（1）五感を刺激する、と（2）同一性を感じさせる、の2点を挙げている。特に適した本として、『どうぶつのおやこ』（藪内、1966）と『いないいないばあ』（松谷・瀬川、1967）を紹介している。山梨子ども図書館の代表的選書リストにおいても、この2冊は「基軸になる選書」として取り上げられており、『どうぶつのおやこ』は「平面にプリントされた表象の認識」ができるようになった10ヶ月前後の子どもに対応した「実物に近い細密画」ということで、動物絵本画家の第一人者である藪内正幸の作品を選んでいる。一方、工藤（2004: 31）はこの本がファーストブックとして優れている理由として、動物の赤ちゃんの傍らに必ず大人の動物が描かれていることが、母子一体感覚の世界に生きるこの時期の子どもに心理的な安心感を与えると述べている。

『いないいないばあ』に関しては、山梨子ども図書館は「動作への反応」を示したり、「連続動作の理解」が可能になる11ヶ月前後の子どもに対応した「動作・しぐさなどの連続画」が描かれているという観点からこの絵本を選書している。工藤（2004: 28）はこの絵本が視神経と脳のコンタクトが希薄な1歳前後の子どもの目に馴染むやわらかい中間色で描かれているという点を、ファーストブックとして適切な理由の筆頭に挙げている。山梨子ども図書館は1歳前後の子どもの絵本は、まず背景が無地で見開きで一種類のものだけが描かれているものから始め、次に地平線があり、背景と対象物の遠近感があるもの、それから2ページにわたる連続動作が描かれている絵本へという順序で導入するのが良いとしている。

1～2 歳児対象の選書

1 歳児に適した絵本として山梨子ども図書館は、子どもが1 歳から2 歳になる過程で認識できるものが次第に増えていくのに合わせて、つまり次のような認識力の成長段階——①メロディーの認識→②線刻画と原色の認識→③変化や順序に対する初期的認識→④特徴的なものの個別認識の開始——に対応して、①歌やリズムを扱った『うたえほん』（つちだ、1988）や『ころころころ』（元永、1984）、②輪郭のはっきりとした原色使いの挿絵が描かれている『こぐまちゃんいたいいたい』（わかやま、1971）、③色彩や形の変化が楽しめる『もこもこもこ』（谷川・元永、1977）、④初期の探し物絵本である『きんぎょがにげた』（五味、1982）などを段階的に選書している。ところが、絵本・児童文学研究センターの選書では③と④に対応する絵本が欠落している。③は2 歳児で導入する「色彩や形主体の絵本」、④は「ストーリー性のある文章語による物語」への橋渡しの役割を果たす絵本であると思われるので、やはり1 歳代で導入しておくべき絵本ではないだろうか。

絵本・児童文学研究センターのブックリストに掲載されている絵本の中から主だったものを選んで解説を加えた『すてきな絵本にであえたら』（工藤、2004）によると、3 歳になるまでに読んであげたい絵本のジャンルとして（1）動物と食べ物がドッキングした絵本、（2）擬態語や擬声語の繰り返しが含まれた絵本、および言葉遊びの絵本が挙げられている。そして、（1）の代表的な選書例として『しろくまちゃんのほっとけーき』（わかやま、1972）、『はらぺこあおむし』（カール、1976）、『なにをたべてきたの？』（岸田・長野、1978）、と『ぐりとぐら』（中川・大村、1963）を紹介している。〈こぐまちゃん〉シリーズは山梨子

ども図書館の選書リストでも1歳の第2四半期用に2冊入っているが、その選書理由はすでに見たように、この時期の子どもには線刻画や原色の認識力がつくからであるのに対して、工藤（2004: 37）の理由は動物絵本は脳旧皮質の発達過程にある子どもの感覚に合っており、食の体験は子どもでも豊富であるからというものである。エリック・カールの絵本に関しては、工藤（2004）は『はらぺこあおむし』（1976）を2歳後半で与え、3歳児に『ごちゃまぜカメレオン』（1978）を選書しているのに対し、山梨子ども図書館では2歳の第2四半期で「色彩・形主体の絵本」として『ごちゃまぜカメレオン』を補助的に加える本の1冊に選んでいる。『なにをたべてきたの?』と『ぐりとぐら』は山梨子ども図書館のリストにも載っているが、この2冊は「形態語としての語形認識」が可能になる3歳児に対応した「初期の展開のある物語絵本」として選書されている。このように、(1)の食べ物扱った動物絵本というジャンルに属する絵本は対象年齢や選書の理由に相違があるものの、絵本・児童文学研究センターと山梨子ども図書館のどちらのブックリストにも含まれている。

ところが、(2)のジャンルに関しては両者の接点はほとんどない。工藤（2004: 32）は擬声語や擬態語を「見立て」の一種であるとし、3歳以降の擬人化にもつながるということで、それらが繰り返し表れる絵本として、『でんぐりでんぐり』（くろい、1982）、『まいごになったぞう』（寺村・村上、1989）、『ちいちゃんとさんりんしゃ』（しみず、1983）の3冊を特に取り上げているが、これらはどれも山梨子ども図書館の選書リストには見当たらない。更に、工藤（2004）は言葉遊び絵本の秀作として『さよならさんかく』（わかやま、1977）と『わにがわになる』（多田、1977）を選んでいるが、この2冊も山梨子ども図書館のリストには

載っていない。1歳半から2歳にかけて急激な言語発達が生じるが、理解言語はそれ以上であるとしても発話可能言語は2歳児で200から300語、3歳児でようやく1,000語程度（無藤、岡本、大坪、2004:33）であるから、『わにがわになる』の中の「はちとはちが はちあわせ」や「からすが こえを からす」といった言葉遊びは3歳以前の子どもには理解することができないのではないだろうか。

因みに、子どもの認識力の成長過程に対応した山梨子ども図書館の選書で「言葉遊び絵本」が登場してくるのは、「観念と意味の分離」が可能になる4歳の第4四半期とかなり後になってからである。しかし、実際の選書において山梨子ども図書館のリストではまず、4歳の初めに性差対応の選書として言葉遊びの「しりとる」を題材とした男の子向けの『まますすきですすてきです』（谷川・立石、1992）と女の子向けの『ぶたたぬききつねねこ』（馬場、1978）を導入しておく。それから、5歳の初めに高度な言葉遊びを扱った絵本を選書する。基軸となる選書の『絵本ことばあそび』（五味、1982）は「言葉の無意味な部分の認識」を促すものであり、そのほかに男の子向けとして『ことばのこぼこ』（和田、1995）、女の子向けに『これはのみのぴこ』（谷川・和田、1979）を用意している。6歳の初めに再び女の子向けの選書として『ことばあそびうた』（谷川・瀬川、1973）が取り上げられているが、これは「言葉の無意味化と多様な表現への視点」が盛り込まれたかなり高度な言葉遊びの本である。

以上の比較から絵本・児童文学研究センターと山梨子ども図書館の選書には共通点はあるものの、相違点の方が多いことがわかる。そこで、もう少し詳しく両者のリストを分析してみたいと思う。まず、各リストに掲載されている本の初版年に焦点を当ててみる。

2つのブックリストの初版年比較

下記の表は絵本・児童文学研究センターが0～3歳児に適応する絵本として選書した75冊の本と、山梨子ども図書館による生後10ヶ月～2歳児を対象とした45冊、および2～3歳児対象の37冊、合わせて82冊の代表的選書リストについて、それぞれ初版の年を調べ1960年代から2000年代まで5つのカテゴリーに分けて、年代ごとの本の合計数と全体に占める割合を算出したものである。

(表1) 絵本・児童文学研究センターのブックリスト：0～3歳児

1960年代	17冊	22.7%
1970年代	28冊	37.3%
1980年代	26冊	34.7%
1990年代	4冊	5.3%
2000年代	0冊	0.0%
合計	75冊	100.0%

(表2-A) 山梨子ども図書館の代表的選書リスト：0～3歳児

1960年代	13冊	15.9%
1970年代	23冊	28.0%
1980年代	24冊	29.3%
1990年代	15冊	18.3%
2000年代	7冊	8.5%
合計	82冊	100.0%

(表2-B) 山梨子ども図書館の代表的選書リスト：10ヶ月～2歳児

1960年代	6冊	13.3%
1970年代	12冊	26.7%
1980年代	18冊	40.0%
1990年代	8冊	17.8%
2000年代	1冊	2.2%
合計	45冊	100.0%

(表 2—C) 山梨子ども図書館の代表的選書リスト：2～3 歳児

1960 年代	7 冊	18.9%
1970 年代	11 冊	29.7%
1980 年代	6 冊	16.2%
1990 年代	7 冊	18.9%
2000 年代	6 冊	16.2%
合計	37 冊	99.9%

上の表から絵本・児童文学研究センターの選書の特徴は 1970～80 年代の作品を中心に（7 割以上）、1960 年代から読み継がれている息の長い作品群も 2 割以上取り上げ、すでに評価の定まったいわゆる「古典絵本」が大部分を占めていることがわかる。1990 年代以降に発表された作品は『あれれれれ』(柳生、1997)、『あっぶっぶ!』(おりも、1997)、『ながーいおはなし』(ひろかわ、1998)、『もけらもけら』(山下・元永、1990) の 4 冊のみで全体の 5% にすぎず、2000 年以降の作品は一冊も含まれていない。

山梨子ども図書館の選書でも 10 ヶ月～3 歳までをまとめた表 2—A を見ると、1970～80 年代に出版された作品が中心になっているが、その割合は 6 割弱と絵本・児童文学研究センターのリストよりもやや低くなっている。そして、後者の選書と決定的に異なるのは初版が 1990 年代以降の新しい本の割合が高いことである。1990 年代に出版された本だけで 15 冊（18.3%）、2000 年代のものも 7 冊（8.5%）あり、両方を合わせると 22 冊（26.8%）となり全体の約 4 分の 1 を占める。それに対し、1960 年代から版を重ねている古典絵本は 13 冊（15.9%）で 2000 年以前に出版された絵本の中では最も低い数値となっている。因みに、山梨子ども図書館が選んだ 1990 年代に出版された絵本 15 冊のうち絵本・児童文学研究センターの選書と重なるものは一冊も無い。また、2000 年以降に出版された本で山梨子ども図書館のリストに入っている

のは、『ねずみさんのながいぱん』（多田、2000）、『そろそろぞろぞろ』（内田・藤枝、2001）、『こぶたほいくえん』（中川・山脇、2001）、『ぼくのせかいをひとまわり』（M・W・ブラウン、C・ハード、2001）、『おやすみクマタくん』（ストーン、2001）、『おやすみなさい』（リンドバーグ、マッケルマリー、2005）、『だっこだっこねえだっこ』（長、2005）の7冊である。

更に、山梨子ども図書館の選書に関して表2-Bと表2-Cを比較すると、後者では1990年代と2000年代に出版された本の合計が13冊（35.1%）で、2～3歳向けの選書全体の3分の1以上がここ十数年の間に出版された新しい本であることがわかる。このように、山梨子ども図書館の選書の特色は比較的新しい本を積極的に採用していることである。

2つのブックリストに共通の選書

次に、絵本・児童文学研究センターのリストに含まれている75冊と、山梨子ども図書館のリスト（10ヶ月～3歳）に入っている82冊のうち、どちらのリストにも掲載されている共通の選書は初版年の古い順に以下の15冊のみである。

1. 『かばくん』（岸田・中谷、1962）
2. 『どうぶつのおやこ』（藪内、1966）
3. 『いないいないばあ』（松谷・瀬川、1967）
4. 『おんなじおんなじ』（多田、1968）
5. 『もうねんね』（松谷・瀬川、1968）
6. 『ねないこだれだ』（せな、1969）
7. 『こぐまちゃんいたいいたい』（わかやま、1971）

8. 『しろくまちゃんのほっとけーき』(わかやま、1972)
9. 『おやすみなさいおつきさま』(M・W・ブラウン、C・ハード、1979)
10. 『くだもの』(平山、1979)
11. 『どうすればいいのかな?』(渡辺・大友、1980)
12. 『どうぶつのおかあさん』(小森・藪内、1981)
13. 『じゃあじゃあびりびり』(まつい、1983)
14. 『おててがでたよ』(林、1986)
15. 『がたんごとんがたんごとん』(安西、1987)

このほかに次の3冊が絵本・児童文学研究センターの0～3歳のリストに載っているが、山梨子ども図書館はそれらを3～4歳にかけて与える本として選んでいるので、この3冊を含めても共通の選書は18冊だけである。

16. 『ぐりとぐら』(中川・大村、1963)
17. 『なにをたべてきたの?』(岸田・長野、1978)
18. 『はけたよはけたよ』(神沢・西巻、1970)

山梨子ども図書館は『ぐりとぐら』を季節対応上、春の本なので子どもが4月生まれであれば3歳になった春に与える本として、『なにをたべてきたの?』は3歳の第2四半期における基軸となる選書の1冊として、『はけたよはけたよ』は主人公が男の子なので性差対応で第1四半期の男の子向けの本として位置づけている。以上の18冊はどれも1960～80年代にかけて出版された絵本で、20～40年以上の長い年月にわたって日本の子どもたちに読み継がれ、すでに高いスタンダード性を獲得している本である。

しかし、共通の選書 15 冊以外で絵本・児童文学研究センターのブックリストに載っている 60 冊の絵本と、山梨子ども図書館の 67 冊は全く別の選書がなされているということである。両者のリストに掲載されている 0～3 歳児向けの絵本の延べ数は 142 冊であるから、共通の選書の割合はたった 1 割にすぎない。同じ年齢の子どもを対象にしながら、心理学的発達対応で選書を行うか、形態学的発達対応で選書を行うかによってこれだけ大きな違いが出るということである。しかし、その他にもこれだけの相違を生み出す要因がいくつか考えられる。

まず、すでに触れたように、絵本・児童文学研究センターがスタンダード性を重視した古典絵本中心の選書を行っているのに対し、山梨子ども図書館は 1990 年代以降に出版された新しい本を多く採用した選書を行っていることである。また、絵本・児童文学研究センターのブックリストが載っているテキストは 1995 年 4 月に初版が出て、その後 2002 年 5 月に 2 回目の改訂版が出ているのに対し、山梨子ども図書館の代表的選書リストは 2003～05 年にかけて実際に用いられたものであるため、両者のリストが作成された年に数年の開きがあることも多少関係しているかもしれない。更に、選書される本の古さ・新しさという点に関しては山梨子ども図書館のリストの場合、実際にブッククラブの子どもたちに本を届けている長谷川敏夫氏の配本プログラムが使われているため、すでに絶版になっているような古い本は当然除外されるが、絵本・児童文学研究センターの場合は講座受講生のための参考文献的なリストのため、たとえ書店で入手できなくても図書館で借りて読むことができればよいので、古い本の割合が高くなっているということもあるだろう。

2つのブックリストで対象年齢の異なる選書

3歳児以降を対象とした絵本も視野に入れて2つのブックリストを比較してみると、同じ本がそれぞれ異なる年齢層の子ども向けの本として選書されているものがあることがわかった。例えば、以下の3冊を山梨子ども図書館は10ヶ月～2歳になるまでに与えるべき絵本としているが、絵本・児童文学研究センターのリストではもう少し高い年齢の子ども向けの本として設定されている。

『さかな』（ワイルドスミス、1971）

月齢 17 ヶ月 → 3～4 歳 [絵本・児童文学研究センター]

『ぞうのボタン』（上野、1975）

月齢 21 ヶ月 → 4～5 歳 [絵本・児童文学研究センター]

『みんなうんち』（五味、1977）

月齢 24 ヶ月 → 3～4 歳 [絵本・児童文学研究センター]

山梨子ども図書館の選書リストでは月齢 17 ヶ月児の「機軸になる選書」として『さかな』（ワイルドスミス、1978）と同じ作者の『とり』（1979）を採用している。『さかな』は「性差およびプラス・アルファ」の本として選ばれている。どちらも絵は輪郭のはっきりとした原色の鮮やかな色彩で描かれ、文はそれぞれの絵を「にじます すいすい」、「みつめる ふくろう」のように二語程度で短く説明したもので、ストーリー性は無い。これらは1歳児の「線刻画および原色の認識」という発達段階に対応させて選書されている。月齢 16 ヶ月児に導入してある『こぐまちゃんいたいいたい』（わかやま、1971）の挿絵も同様の特徴を持

つが、それが平面的かつポスター調であるのに対し、『さかな』や『とり』のそれは実物に近く芸術性の高い美しい絵である。3～4歳児でももちろん視覚的に十分楽しめる絵本ではあるが、その時期の子どもは展開のある物語絵本へと移行していくので『さかな』や『とり』のような文が非常に短く、ストーリー性のない絵本はやはり1歳代で与えておくべきであろう。

幼児前期の子どもにとって排泄という基本的生活習慣を身につけることは一つの大きな課題であるが、通常トイレ・トレーニングは1歳半過ぎに始めるのが良い（田島・西野・矢澤、1985: 67）とされている。山梨子ども図書館のリストでは『みんなうんち』（五味、1977）と『しっこっこ』（西内・和歌山、1999）は2歳直前の子どもの本として選書されているが、これはちょうど排泄のしつけが終了する頃に合わせているものと思われる。絵本・児童文学研究センターのように3～4歳ではタイミングがずれてしまうのではないだろうか。

『ぞうのぼたん』（上野、1975）に関して、絵本・児童文学研究センターはなぜこれを4～5歳児対象の本として選書しているのだろうか。この絵本は文字の全く無い単色の線刻画で描かれ、4つのボタンのついたぬいぐるみの象の中から、ボタンがはずれて馬が出てくるというように、次々と前よりも小さな動物が出てくるが、最後に小さなネズミのぬいぐるみの中から大きな象が出てくるという展開になっている。これは明らかに「線刻画と変化・順序への初期の認識」の発達段階に達した1歳代の子ども向けの本であるから、選書上の内容分析不足ではないかと思われる。

次に、以下の絵本群は山梨子ども図書館のリストでは2歳児が3歳になるまでに与える本として選ばれているが、絵本・児童文学研究センタ

ーのリストでは対象年齢がより高く設定されているものである。

山梨子ども図書館

絵本・児童文学研究センター：3～4 歳向け

月齢 28 ヶ月	『おおきなかぶ』(内田、1962) *
月齢 30 ヶ月	『ごちゃまぜカメレオン』(カール、1978)
月齢 30 ヶ月	『わたしのワンピース』(にしまき、1969)
月齢 31 ヶ月	『もりのなか』(エッツ、1963) *
月齢 35 ヶ月	『木のうた』(イエラ・マリ、1977)
月齢 36 ヶ月	『ちびゴリラのちびちび』(ボーンスタイン、1978)
月齢 36 ヶ月	『ぐるんぱのようちえん』(西内・堀内、1966) *
月齢 36 ヶ月	『しょうぼうじどうしゃじぶた』(渡辺・山本、1963)

4～5 歳向け

月齢 32 ヶ月	『ちいさなヒッポ』(M・ブラウン、1983)
----------	------------------------

5～6 歳向け

月齢 29 ヶ月	『はろどとむらさきのくれよん』(ジョンソン、1972)
月齢 30 ヶ月	『ぼくのくれよん』(長、1974) *
月齢 34 ヶ月	『はなをくんくん』(R. クラウス・M. シーモント、1967)
月齢 35 ヶ月	『とりかえっこ』(さとう・二俣、1978)

以上のうち*の印が付けてある4冊と、絵本・児童文学研究センターのリストで0～3歳児対象の絵本の中に入っている『ぐりとぐら』(中川・大村、1963)の計5冊について、山梨子ども図書館の選書リストでは2～3歳児の成長段階に応じて次の順序で導入している。

- No. 1 2 歳前～中期：初期の形態語認識、集合概念の発達
『おおきなかぶ』＝初期の文章語による物語
- No. 2 2 歳中～後期：表現言語の増加、表象の表現
『ぼくのくれよん』＝色彩・形主体の広がりを持つ絵本
2 歳中～後期：夢幻的な感覚の終末段階
『もりのなか』＝単純な繰り返しストーリー
- No. 4 2 歳後期～3 歳前期：初期の自然数認識、自我の分離
『ぐるんぱのようちえん』＝自己同一化できる絵本
- No. 5 3 歳前～中期：形態語としての語形認識
『ぐりとぐら』＝初期の展開のある物語絵本

同様に絵本・児童文学研究センターのブックリストに沿ってこれら 5 冊を並べて見ると次のような順序になる。

- No. 1 0～3 歳前後：五感の発達、母子一体感覚
『ぐりとぐら』
- No. 2 3～4 歳前後：体験の拡大、母子分離の心理
『おおきなかぶ』
『もりのなか』
『ぐるんぱのようちえん』
- No. 5 5～6 歳前後：自我の萌芽
『ぼくのくれよん』

両者を比較して大きな違いが見られるのは、『ぼくのくれよん』（長、1974）と『ぐりとぐら』（中川・大村、1963）の扱いである。絵本・児童文学研究センターでは『ぐりとぐら』を 0～3 歳の母子一体感覚を持

っている子ども向けの本としているが、この作品は5冊のうち最もストーリー性の高いものなので、やはり山梨子ども図書館のように『もりのなか』（エッツ、1963）のような単純な繰り返しのある物語を体験した後の段階で与えるのが妥当であろう。

そして、絵本・児童文学研究センターは『ぼくのくれよん』を自我の萌芽がみられる5～6歳前後の子ども向けの本としているが、この選書はこの時期の子どもの心理学的発達に対応しているとは思えない。また、同センターが5～6歳児向けの本として選んでいる残り3冊の絵本、『とりかえっこ』（さとう・二俣、1978）、『はろるとむらさきのくれよん』（ジョンソン、1972）、『はなをくんくん』（R. クラウス・M. シーモント、1967）についても同様のことがいえる。これらの絵本は5～6歳の子どもが自分で読む本としては適切かもしれないが、読み聞かせる本としての導入はもっと早い段階でしておくべきではないだろうか。

『ぼくのくれよん』は原色の鮮やかな色彩で描かれた長新太らしい大胆なイラストが特徴で、巨大な象が大きなクレヨンで青や赤や黄色に塗りつぶすと、他の動物たちがそれを池や火事やバナナだと思って惑わされ、とうとう象はライオンにしかられるが、それでも象は再びクレヨンを持って駆け出すというシーンで終わっている。山梨子ども図書館では2歳代は想像力の増加を基本とした選書が必要な時期なので、「広がり」を持った内容の本を選ぶことをポイントとしている。その選書例が『ぼくのくれよん』や、男の子が散歩しながらクレヨンで描く絵が次々に現実化していくという『はろるとむらさきのくれよん』、同じく森へ散歩に出かけた男の子が次々に動物の仲間を従えて、父親が迎えに来るまで楽しく遊ぶという『もりのなか』である。これらは幼児後期を迎えた5～6歳の子ども向けというよりは、2歳児に適した本ではないだろうか。

『はなをくんくん』は冬眠している動物たちが春の気配で次第に目を

覚まし、雪原に咲く一輪の小さな黄色い花のもとに駆けつけてみんなで春の訪れを喜ぶ姿を、モノクロの落ち着いた色彩の中に花だけわずかに明るい原色を効果的に使って描いた絵本である。文は「みんな ねむってるよ」「はなを くんくん」「みんな かけてく」といった短いフレーズが何回も繰り返される。確かに季節の移り変わりを何度か体験した4～5歳児には春の来る喜びがわかるので、この絵本がよりよく理解できるであろうが、それでもこれは4～5歳で初めて導入すべき絵本ではないだろう。

以上のような対象年齢のずれは心理学的発達対応の選書に問題があるというよりも、むしろ個々の絵本の内容分析不足によるのではないかと思われる。

おわりに

本稿では0～3歳児対象の絵本に限定して2つのブックリストを比較検討してみたが、心理学的発達対応と形態学的発達対応の選書には共通点よりも相違点の方が多いこと、そして形態学という全く新しい視点を採り入れた方法の方が、急速な成長期にある0～3歳児の認識力の発達過程に即したより客観的な選書ができるということがわかった。形態学的発達対応の選書では、比較的新しい絵本が多数採用されており、それらが正確な内容分析に基づいて月齢ごとに段階的に紹介されているのが利点である。

現在入手可能な大多数のブックリストの問題点のひとつは、定期的な改訂がそれほど頻繁に行われることが無いので、どうしても評価の定まっている古典絵本に依存する割合が高くなり、優れた新刊が紹介される余地があまりないことである。ブックリストを作成するからには、常に

それをアップデートさせて利用者に最新情報を提供するのでなければ利用価値が低いものになってしまうのではないだろうか。しかし、それには日本で毎年 3,000 冊近く出版される児童書を丹念に読んで評価するという膨大な時間とエネルギーを必要とする作業が不可欠である。

二つ目の問題点は、対象年齢の幅が広く、あまりにも多くの本が紹介されていることである。「0～3 歳」「幼児」「幼稚園児」対象の絵本というような大まかな区分けで多数の絵本が書名の五十音順に並べられているようなブックリストでは、個々の本がその年齢幅の子どものどのあたりの成長段階に対応した本であるか、また紹介されている数多くの本のうちどれが基本となる重要な本で、子どもが見たい時にいつでも手に取ることができるように家庭に備えておくのが望ましい本なのか、そして複数の本をどのような順序で与えていくのが子どもの発達段階に適合しているのかといった細かい情報を入手することができないことである。0～3 歳児の選書においては特に詳細な段階的選書リストが必要である。

最後に、ブックリストに載せる本を選択する際には何よりも十分な内容分析を行うことが重要であることはいうまでもない。

参考文献

- 赤木かん子 (2002)『絵本・子どもの本総解説第 5 版』、東京：自由国民社。
- 絵本・児童文学研究センター編 (2002)『基礎講座資料集 改訂版 TEXT1』、小樽：NPO 法人 絵本・児童文学研究センター。
- フランク・B・ギブニー編 (1995)『ブリタニカ国際大百科事典：第 3 版第 6 巻』、東京：ティー・ビー・エス・ブリタニカ。
- キラキラ読書クラブ編 (2006)『キラキラ読書クラブ：子どもの本 644 冊ガイド』、東京：日本図書センター。
- 工藤左千夫 (2004)『すてきな絵本にであえたら』、横浜：成文社。
- 清水美千子 (1984)『絵本の世界 (1) 幼稚園・保育園児のための 100 冊』、東京：明治図書。

清水美千子（1985）『絵本の世界（2）幼稚園・保育園児のための100冊』、東京：明治図書。

清水美千子（1986）『絵本の世界（3）幼稚園・保育園児のための100冊』、東京：明治図書。

下中弘（1988）『世界大百科事典第8巻』、東京：平凡社。

瀬田貞二（1985）『子どもの本の評論集 絵本論』、東京：福音館書店。

田島信元、西野泰広、矢澤圭介編（1985）『子どもの発達心理学』、東京：福村出版。

ひこ田中（2005）『大人のための児童文学講座』、東京：徳間書店。

田中裕子（1995）『赤ちゃんに贈る絵本ガイドブック：0歳から3歳児のために』、東京：グラン
まま社。

アーノルド・トインビー（1979）『歴史の研究』、東京：中央公論社。

日本子どもの本研究会絵本研究部編（1989）『えほん：子どものための500冊』、東京：一声社。

日本子どもの本研究会絵本研究部編（1995）『えほん：子どものための140冊』、東京：一声社。

日本児童文学者協会編（1981）『改訂：世界の絵本100選』、東京：偕成社。

日本児童文学者協会編（1981）『改訂：日本の絵本100選』、東京：偕成社。

日本児童文学者協会編（1977）『世界の絵本100選』、東京：偕成社。

日本児童文学者協会編（1977）『日本の絵本100選』、東京：偕成社。

松居直（1995）『絵本の森へ』、東京：日本エディタースクール出版部。

向川幹雄（1998）『0歳から3歳の絵本のひずみ』、東京：高文堂出版社。

無藤隆、岡本裕子、大坪治彦編（2004）『よくわかる発達心理学』、京都：ミネルヴァ書房。

ちひろ美術館編（1999）『親子で楽しむえほん100冊：ちひろ美術館が選んだ』、東京：メイツ出
版。

鳥越信（1982）『子どもの本の選び方・与え方』、東京：大月書店。

吉田直子、片岡基明編（2003）『子どもの発達心理学を学ぶ人のために』、京都：世界思想社。

渡辺茂男（1978）『絵本の与え方』、東京：日本エディタースクール出版部。

絵本（書名の五十音順）

『あっぷっぷ！』おりもきょうこ；フレーベル館、1997年。

『あれれれれ』柳生弥一郎；福音館書店、1997年。

『いないいないばあ』松谷みよ子、瀬川康男；童心社、1967年。

『うたえほん』つちだよしはる；グランまま社、1988年。

『絵本ことばあそび』五味太郎；岩崎書店、1982年。

『おおきなかぶ』内田莉沙子（再話）、佐藤忠良；福音館書店、1962年。

- 『おててがでたよ』林明子；福音館書店、1986年。
- 『おやすみクマくん』カズコ・G・ストーン；福音館書店、2001年。
- 『おやすみなさい』R・リンドバーク、J・マックエルマリー；アリス館、2004年。
- 『おやすみなさいおつきさま』M・W・ブラウン、C・ハード；評論社、1979年。
- 『おんなじおんなじ』多田ヒロシ；こぐま社、1968年。
- 『がたんごとんがたんごとん』安西水丸；福音館書店、1987年。
- 『かばくん』岸田衿子、中谷千代子；福音館書店、1962年。
- 『木のうた』イエラ・マリ；ほるぷ出版、1977年。
- 『きんぎょがにげた』五味太郎；福音館書店、1982年。
- 『くだもの』平山和子；福音館書店、1979年。
- 『ぐりとぐら』中川李枝子、大村百合子；福音館書店、1963年。
- 『ぐるんぱのようちえん』西内みなみ、堀内誠一；福音館書店、1966年。
- 『こぐまちゃんいたいいたい』わかやまけん；こぐま社、1971年。
- 『ごちゃまぜカメレオン』E・カール；ほるぷ出版、1978年。
- 『ことばあそびうた』谷川俊太郎、瀬川康男；福音館書店、1973年。
- 『ことばのこぼこ』和田誠；瑞雲社、1995年。
- 『こぶたほいくえん』中川李枝子、山脇百合子；福音館書店、2001年。
- 『これはのみのびこ』谷川俊太郎、和田誠；サンリード、1998年。
- 『ころころころ』元永定正；福音館書店、1984年。
- 『さかな』B・ワイルドスミス；らくだ出版、1978年。
- 『さよならさんかく』わかやまけん；こぐま社、1977年。
- 『しっここ』西内ミナミ、和歌山静子；偕成社、1999年。
- 『じゃあじゃあびりびり』まついのりこ；偕成社、1983年。
- 『しょうぼうじどうしゃじぶた』渡辺茂男、山本忠敬；福音館書店、1963年。
- 『しろくまちゃんのほっとけーき』わかやまけん；こぐま社、1972年。
- 『ぞうのボタン』上野紀子；富山房、1975年。
- 『そろそろぞろぞろ』内田麟太郎、藤枝リュウジ；金の星社、2001年。
- 『だっこだっこねえだっこ』長新太；ポプラ社、2005年。
- 『ちいさなヒッポ』マーシャ・ブラウン；偕成社、1984年。
- 『ちいちゃんとさんりんしゃ』しみずみちを；ほるぷ出版、1983年。
- 『ちびゴリラのちびちび』R・ボーンスタイン；ほるぷ出版、1978年。

- 『でんぐりでんぐり』くろいけん；あかね書房、1982年。
- 『どうすればいいのかな？』渡辺茂男、大友康夫；福音館書店、1980年。
- 『どうぶつのおかあさん』小森厚、戴内正幸；福音館書店、1981年。
- 『どうぶつのおやこ』戴内正幸；福音館書店、1966年。
- 『とり』B・ワイルドスミス；らくだ出版、1979年。
- 『とりかえっこ』さとうわきこ、二俣英五郎；ポプラ社、1978年。
- 『どろんここぶた』A・ローベル；文化出版局、1971年。
- 『ながーいおはなし』ひろかわさえこ；あかね書房、1998年。
- 『なにをたべてきたの？』岸田衿子、長野博一；佼成出版社、1978年。
- 『ねずみさんのながいばん』多田ヒロシ；こぐま社、2000年。
- 『ねないこだれだ』せなけいこ；福音館書店、1969年。
- 『はけたよはけたよ』神沢利子、西巻茅子；偕成社、1970年。
- 『はなをくんくん』R・クラウス、M・シーモント；福音館書店、1967年。
- 『はらべこあおむし』E・カール；偕成社、1976年。
- 『はろろどとむらさきのくれよん』C・ジョンソン；文化出版局、1984年。
- 『ぶたたぬききつねねこ』馬場のぼる；こぐま社、1978年。
- 『ぼくのくれよん』長新太；講談社、1974年。
- 『ぼくのせかいをひとまわり』M・W・ブラウン、C・ハード；評論社、2001年。
- 『まいごになったぞう』寺村輝夫、村上勉；偕成社、1989年。
- 『ままですすきですすてきです』谷川俊太郎、タイガー立石；福音館書店、1986年。
- 『みんなうんち』五味太郎；福音館書店、1977年。
- 『もうねんね』松谷みよ子、瀬川康男；童心社、1968年。
- 『もけらもけら』山下洋輔、元永定正；福音館書店、1990年。
- 『もこもこもこ』谷川俊太郎、元永定正；文研出版、1977年。
- 『もりのなか』M・H・エッツ；福音館書店、1963年。
- 『わたしのワンピース』にしきかやこ；こぐま社、1969年。
- 『わにがわになる』多田ヒロシ；こぐま社、1977年。